

「主は生きておられる」

(ヨハネ20:1～10)

挽地茂男

2019.10.6 日本基督教団千歳丘教会

もともと聖書、英語で Bible を意味する言葉は、ギリシア語のビブロス (βίβλος) という言葉です。これは「本」という意味の言葉です。この聖書という本はふつうの本とは少し違った読書経験を生み出します。太宰治の『走れメロス』やドストエフアスキーの『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』や漱石の『坊ちゃん』や、『赤毛のアン』や『銀河鉄道の夜』や『龍馬がいく』など名作と呼ばれている作品を読むと、その作品の主人公や登場人物の行動や生き方に強い感動や共感を覚えることがあります。そのような感動や共感に満たされる



と、わたしたちはその小説や小説の登場人物との「出会い」を非常に大切なこととして心にとどめます。聖書もやはり「出会い」を生み出す本なのです。

松永希久夫という人が、NHKブックスから1989年に出された

『歴史の中のイエス像』という本の中(229頁)で次のようなことを言っています。ちょっと抽象的な表現が多いのですが、お読みします。

「福音書伝承も、福音書も、初代教会の生活・活動の中から出てきました。〔教会の“生活の座”〕すなわち、礼拝がその中心にあるのですが、そこで繰り返されている過去の人ナザレ人イエスの記憶の想起(アナムネシス)と、想起という形での現在の人主イエス・キリストとの出会いの内から伝承も福音書も産まれてきたのであり、また、そうした伝承——のちには福音書——を媒介に

“記憶の想起”と“想起という形での出会い”が成立してきたのであります。福音書という文学類型の性質はそこに求められるのです。」

つまり福音書の価値は、この主イエスとの出会いを再生産するという所にあると語っているのです。礼拝において過去の人イエスの物語が読まれます、イエスのことが語られる、そのことによって過去の人イエスが思い起こされ、想起されることによって、現在化する、現在の人として迫ってくる。それを可能にするのが福音書という書物だと言うのです。

キリスト教はこのような聖書を通

してイエス・キリストとの出会いによって成り立っている宗教なのです。そしてこの主「イエスとの出会い」は、ふつうの読書から得られる経験の範囲を超えているのです。そこに、この宗教独特の経験が生じるからです。

主「イエスは生きておられる」という復活のメッセージは、人間の理性をすでに超えています。この「イエスは生きておられる」というメッセージはどう見ても簡単には受け入れられないメッセージです。非合理的なのです。今日の聖書の場面を見てみましょう。



1-2節。20:1 週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。

20:2 そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」

マグダラのマリアは安息日が明けると、主イエスの亡骸が納められた墓に出かけました。主イエスを慕う強い思いに引かれて、すでに屍となった主の許に、少しでも主イエスの近くにいたいと思ったからでした。しかし墓に出向いてみると、墓の入口を塞いでいるはずの、あの大きな石が脇に動かされていて、墓の入口が露わになっているのです。墓は空でした。彼女は一目散に弟子たちの許に走って伝えます。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません」(v.2)。ご遺体がないのです。誰かが遺体を運び出し、どこかに移動したのだ、と彼女は思いました。空の墓、遺体がない、誰かが運び去ったにちがいない。そう考える以外にない。合理的にはそうとしか考えられないのです。正しい推論です。

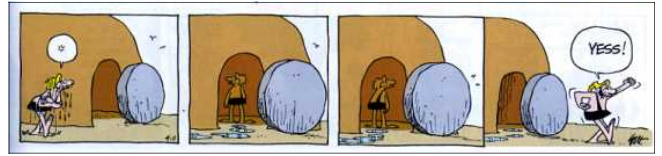
以前にもお話ししましたが、太平洋放送協会のラジオ牧師として長く仕事をされた羽鳥明という牧師がいますが、彼の弟さんの入信の次第を話してくださったのを聞いたことがあります。すでにキリスト教徒になっていた羽鳥明氏は、自分の弟の羽鳥純二氏が信仰を持ってくれることを願って教会に招きました。弟は教会に来てく

れたのですが、羽鳥明先生は「しまった」と思ったそうです。（イースターだったのです）牧師は、イエスは死者の中からよみがえったと語り始めたのです。しまったと思いました。東大卒で、しかも理系で〔理学部火薬学科〕、共産党員で、日本鋼管でオルグ活動をしたために首を切られたほどの、筋金入りの唯物論者の弟が、はじめて教会に来て死人の中から生き返った教祖を信じるはずがない。これで当分彼に入信の機会は訪れないだろうと思ったそうです。しかし弟は分かっていたんですね。「復活」——これだな。これがキリスト教の中心だ。それは彼がまともな共産主義者だったからです。〔よく宗教はアヘンだと言う時、キリスト教に関して言えば、キリスト教のアヘンがこれだと思ったのかもしれませんが。〕キリスト教に入信するか否かは別として、復活がキリスト教の核心部分であることは、彼がまともなキリスト教批判者で



園の墓

あれば、必ず知っています。弟の共産主義者は確かに「これだ」と思ったのです。のちに羽鳥純二氏はキリスト教に入信し、牧師になります。



さて聖書の復活物語にもどりましょう。3-8節。「20:3 そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。20:4 二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。20:5 身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。20:6 続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。20:7 イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。20:8 それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。」

マグダラのマリアの知らせを受けて、二人の弟子たちが走って墓にやってきます。一番弟子のペトロと、主イエスが愛された愛弟子です。足が速かった愛弟子はペトロよりも先に墓に到着します。入口から中をのぞくと、主イエスの亡骸を包んでい

た亜麻布が見えます。しかし彼は慎重な人だったのか、墓の中には入りませんでした。ペトロが遅れてやって来ました。ペトロは——ペトロらしいと思いますが——躊躇なく墓の中に入ります。墓の中には、亜麻布と亜麻布から少し離れたところにイエスの頭を包んでいた覆いがあるだけでした。ペトロの行動に触発されて、先についた愛弟子も、墓の中に入ってきました。聖書はこの愛弟子の不思議な変化を記しています。彼は墓の中に入って「来て」、「見て、信じた」というのです。「見た」というのは墓の中の様子を見た、ということでしょう。「信じた」というのは、「イエスが甦った」ことを信じたということなのではないでしょうか。

この「来て」「見て」「信じた」という言葉に少しこだわってみましょう。実はこの動詞の組み合わせは、ヨハネ福音書に特徴的な組み合わせなのです。1章に出てきます。最初の弟子たちを召す召命の物語の中に出てきます。1章35－41節。

1:35 その翌日、また、〔洗礼者〕ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。1:36 そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。1:37 二人の弟子はそれ

を聞いて、イエスに従った。1:38 イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ——『先生』という意味——どこに泊まっておられるのですか」と言うと、1:39 イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。

午後四時ごろのことである。1:40

〔洗礼者〕ヨハネの言



葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。1:41 彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った」と言った。

「来て」「見る」ことが「信仰」の出来事につながるのです。言葉としてもっとはっきり出てくるのがその続きの、フィリポとナタナエルの召命の箇所です。1章43－50節。

1:43 その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポ

に出会って、「わたしに従いなさい」と言われた。1:44 フィリポは、アンデレとペトロの町、ベトサイダの出身であった。1:45 フィリポはナタナエルに出会って言った。「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」1:46 するとナタナエルが、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったので、フィリポは、「来て、見なさい」と言った。1:47 イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言われた。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」1:48 ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うと、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」と言われた。1:49 ナタナエルは答えた。「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」1:50 イエスは答えて言われた。「いちじくの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。もっと偉大なことをあなたは見ることになる。」「来る」ことと、「見る」ことと、「信

じる」ことがダイナミックにつながっています。今日の箇所では、



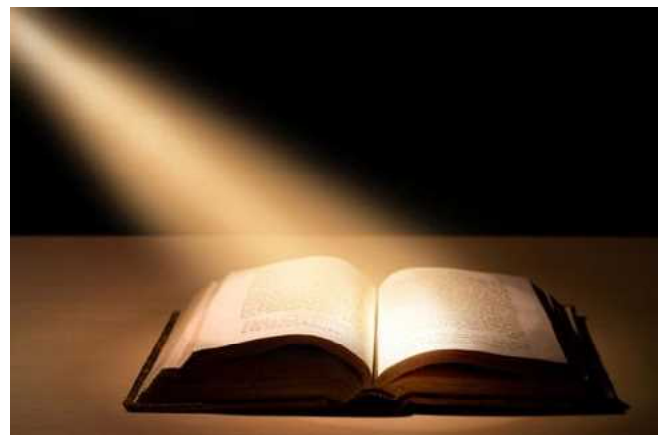
愛弟子に遅れて墓に到着したペトロは、「彼は墓に入^レって来て〔εἰσῆλθεν 接近〕、亜麻布が置いてあるのを見た〔観察〕」(v. 6) とまでは書かれています。しかし、「信じた」とまでは書かれていません。それに対して愛弟子は、「…先に墓に着いたもう一人の弟子も入^レって来て〔εἰσῆλθεν 接近〕、見て〔観察〕、信じた〔信仰〕」(v. 8) と、ペトロと対照的に描かれています。マグダラのマリアとも対照的です。マリアはただただ主イエスを納めた墓が空になっていることに驚いて行動に出ます。しかしその「驚き」はまだ「信仰」に達していません。彼女はまだ悲しみの中にいるのです(v. 11)。〔11節以下の物語で、やがて彼女は「見て」「信じる」に至るのです。〕愛弟子はペトロより先に墓に到着しましたが、その〈接近〉においては慎重だったのです。後についたペトロが先に墓に入^レってしまいます。しかし入^レって「来て」(接近して)「見た」(観察した)

だけのペテロとは違って、この愛弟子は、入って「来て」（接近して）「見て」（観察して）「信じる」（信仰に至る）のです。「来る」こと〈接近〉と、「見る」こと〈観察〉と、「信じる」こと〈信仰〉がダイナミックに互いに結びつきます。〔ここではまだ信仰に至らないペテロには〈信仰〉にいたる別のプロセスが用意されているのです。〕信仰に至るプロセスも成長の仕方も、それぞれ違うのです。そしてそれぞれの「信仰」は、最終的にあの弟子のトマスに主イエスが教えられたように、「見ないで信じる信仰」へと成長していくのです（v. 29）。

少し興味深い点が二つあります。第一は、「信じた」愛弟子は、実際は空の墓しか見ていないと言うことです。復活の主を見たのではないということです。主イエスの言葉（復活の預言を含めて）は聞いていたでしょうが。つまりこの愛弟子は実際「見ないで信じる信仰」の先駆けになっているのです。第二の点は、8節で愛弟子が「信じた」と言われている直後の聖書の言葉です。9節。

「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」という聖書の言葉を、二人はまだ理解していな

ったのである。」信じたはずの弟子が聖書を理解していない、ということです。聖書理解は「信じる」ことよりも後に来ることは頻繁にあるのです。「（見て）信じる」と「聖書を理解していない」は矛盾しないのです。聖書が後から理解されてくるプロセスがあるのです。「信じる」とは「理解」に先行する、態度の変化を言うのです。信仰は信念と違います。いつも申し上げるように、信仰は信念のように、なくさないように、しっかりと握りしめて離さないものではなく、神と神の言葉とそして神が与えられた事態に対して自分を開くことを言うのです。そのとき、この箇所にあえて「何を信じた」のかという信仰の対象が書かれずに、唐突に「見て、信じた」と書かれていることの理由が分かってきます。それは「信じる」ということ「信仰」というものが、信頼をもって自らを開くとい



うあり方そのものを意味しているからです。人生の基本的な態度そのものを意味しているからです。

しかしイエスを葬った墓が空であったことについて、わたしたちの理性は、何らかの説明を要求します。マグダラのマリアにはあのような説明しかありませんでした。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません」。合理的な説明を、わたしたちの頭は求めるのです。その時よくなされる説明が、主イエスの復活を、心の問題として説明する説明です。遠藤周作もそうです。遠藤周作の復活理解は、ポイントが二つあるのですが、その一つです。こういう理解です。彼は、人は死んでも「大



切に思う人の心の中に生き続けること」これを復活と言

います。『深い河』の一節です。

「玉ねぎ〔キリスト〕が殺されたとき」と大津は地面をじっと見つめながら呟いた。まるで自分に言い聞かせるように、「玉ねぎの愛とその意味とが、生き延びた弟子たちにやっと分かったんです。弟子たちは一人

残らず玉ねぎを見棄てて生きのびたのですから。裏切られても玉ねぎは弟子たちを愛し続けました。だから彼等一人一人の後ろめたい心に玉ねぎの存在が刻み込まれ、忘れられぬ存在になっていったのです。」(中略)

「以来、玉ねぎは彼等の心のなかに生きつづけました。玉ねぎは死にました。でも弟子たちの中に転生した〔甦った〕のです」

とても分かりやすい説明です。同時に復活の大切な側面を指摘していますが、聖書の言う復活からはずれています。これは復活を心の問題として扱います。復活を精神化したものです。この種の理屈付け、つまり合理化は、事柄を自分の合理つまり理性に合わせてコントロールしようとするのです。そうすることによって安心しようとする人間の精神の働きの結果です。ふつうの健全な精神の働きです。しかし復活にたいする信仰は、心のもち方や、強い信念やマインド・コントロールによって生じるのではないのです。割り切れるものではないのです。それは出会いだからです。

ある人がキリスト教の新聞に、昔の神学生時代の思い出として、こんなことを書いていました。その神学

生がある先生〔関田寛雄先生〕の授業を受けていたある日のこと、一つの小さな「事件」が起きました。

「奇跡物語」についての学生の発表と先生のコメントがあり終了間際のことです。一人の学生が突然手を挙げて質問をしました。「先生、奇跡〔復活〕といっても今の科学からいえばそんなものはありえません。ぼくには奇跡なんて信じられません」

一瞬にしてその場が凍り付きました。全員牧師を目指している神学生ばかりのゼミ。そういう場でこんな質問が出たのです。みんなは息を呑みながら先生を注視しました。いつ先生が怒り出すかとドキドキしながら……。

ところが、まったく予想だになかった答えが返ってきたのです。しばらくの沈黙の後、先生はニヤッと笑ってひとこと、「それを言っちゃあ、おしめえよ……」(ふうてんの寅



さんの名台詞)。この先生は、(a) 笑ってごまかしたのではありません。つまり(b) 科学の問題、合理の問題にしちゃっちゃあおしめえよ。割り切れてしまったらおしめえよ、

と言いたいのです。

弟子たちの信仰も出会いから始まったのです。「主イエスは生きておられる」という信仰によって「復活の新しい生命を生き始める」という事態が起きたのです。そしてその出会いが聖書を通して再生産され続けているのです。復活は強固な意志の問題ではなく、出会いの問題なのです。復活の信仰は、主の側からやって来るのです。

出会いと言っても何か大げさな、劇的な出来事を意味しているのではありません。C. S. ルイスという人は「僕は、お兄ちゃんの自転車の後ろに乗っているときに神様を信じました(信仰を持ちました)」と言います。信仰はさりげなくやって来ることもあるのです。お兄ちゃんの背中から伝わる安心感が、神様を信じる信頼へと変化したのかも知れません。よく分かりませんが、出会いは計画できないから出会いなのです。出会いは出来事なのです。

ヨハネの黙示録に、人々の心の扉を叩くキリストを表現した言葉があります。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共

に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」(黙3:20)。

この言葉を絵にした有名な絵があります。夜、灯りがついた扉の前で、キリストがドアをノックしています。扉には取っ手(ドアノブ)がついていません。開けるのは、中に住む住人以外にありません。イエスは今もわたしたちの心の扉を叩いておられます。わたしたちが開くと、共に食事をすると言われるのです。今日、わたしたちも心を開いて、キリストと共に、聖餐という食事にあずかりましょう。

2019.10.6 日本基督教団千歳丘教会



20:1 週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。

20:2 そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」

20:3 そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。

20:4 二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。

20:5 身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。

20:6 続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。

20:7 イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。

20:8 それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。

20:9 イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖

書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。

20:10 それから、この弟子たちは家に帰って行った。

20・1 Τῇ δὲ μιᾷ τῶν σαββάτων Μαρία ἡ Μαγδαληνὴ ἔρχεται πρῶτ' σκοτίας ἔτι οὔσης εἰς τὸ μνημεῖον καὶ βλέπει τὸν λίθον ῥημένον ἐκ τοῦ μνημείου.

20・2 τρέχει οὐκαὶ ἔρχεται πρὸς Σίμωνα Πέτρον καὶ πρὸς τὸν ἄλλον μαθητὴν ὃν ἐφίλει ὁ Ἰησοῦς καὶ λέγει αὐτοῖς, Ὑραν τὸν κύριον ἐκ τοῦ μνημείου, καὶ οὐκ οἶδαμεν ποῦ ἔθηκαν αὐτόν.

20・3 Ἐξῆλθεν οὐδὲ Πέτρος καὶ ὁ ἄλλος μαθητής, καὶ ἤρχοντο εἰς τὸ μνημεῖον.

20・4 ἔτρεχον δὲ οἱ δύο ὁμοῦ· καὶ ὁ ἄλλος μαθητής προέδραμεν τάχιον τοῦ Πέτρου καὶ ηπρώτος εἰς τὸ μνημεῖον,

20・5 καὶ παρακύψας βλέπει κείμενα τὰ ὀθόνια, οὐ μέντοι εἰσῆλθεν.

20・6 ἔρχεται οὐκαὶ Σίμων Πέτρος ἀκολουθῶν αὐτῷ καὶ εἰσῆλθεν εἰς τὸ μνημεῖον, καὶ θεωρεῖ τὰ ὀθόνια κείμενα,

20・7 καὶ τὸ σουδάριον, ὃ ἥπ' ἐπὶ τῆς κεφαλῆς αὐτοῦ, οὐ μετὰ τῶν ὀθονίων κείμενον ἀλλὰ χωρὶς ἐντετυλιγμένον

εἰς ἓνα τόπον.

20·8 τότε οὐεἰσῆλθεν καὶ ὁ ἄλλος
μαθητῆς ὁ ἐλθὼν πρῶτος εἰς τὸ
μνημεῖον καὶ εἰκαὶ ἐπίστευσεν·

20·9 οὐδέπω γὰρ ᾔδεισαν τὴν γραφὴν
ὅτι δεῖ αὐτὸν ἐκ νεκρῶν ἀναστῆναι.

20·10 ἀπῆλθον οὐπάλιν πρὸς αὐτοὺς
οἱ μαθηταί.



©2014MMBOX PRODUCTION